

タイトル	資料紹介三浦（堀田）綾子の「あかだも」掲載歌 付 ・「あかだも」掲載の前川正追悼文
著者	田中，綾；一色，紗矢香；岩男，香織；TANAKA, Aya； ISSHIKI, Sayaka；IWA0, Kaori
引用	北海学園大学人文論集(76)：134(三五)-113(五六)
発行日	2024-03-31

## 資料紹介 三浦（堀田）綾子の「あかだも」掲載歌

付・「あかだも」掲載の前川正追悼文

田 中 綾・一色 紗矢香・岩 男 香 織

キーワード…三浦綾子、堀田綾子、短歌、「あかだも」、「アララギ」、単行本未収録、前川正追悼

作家の三浦綾子（旧姓・堀田）は、一九四九年から一九六一年まで、全国的な結社誌「アララギ」等に短歌を發表していた。具体的な掲載内容については、池田和利と田中綾の共著「資料紹介 三浦（堀田）綾子の『アララギ』掲載歌」に収録されているが、このたび、札幌市に発行所を置いていた歌誌「あかだも」で新たに単行本未収録の短歌を確認できたので、ここに紹介したい。

「あかだも」は歌誌「羊蹄」の後継誌の一つで、札幌や

小樽を中心とした「アララギ」の地方誌であった。一九五三年一月創刊当初の発行所は、「札幌市南十六条西九丁目 加藤美穂方」であったが、十五号で休刊。一九五四年九月に、上村みのる、村上綾朗らが復刊させた<sup>(2)</sup>。現存する通巻第六号（一九五五年三月号）では「札幌市豊平町五条十丁目 上村みのる方 あかだも短歌会」と記され、一年ほど、上村みのると村上綾朗が編集していた<sup>(3)</sup>。

第三卷第十・十一号（一九五五年十・十一月号）以降は「札幌市南十六条西五丁目 藤本和子方 あかだも発行所」となり、藤本和子が編集兼発行者となった。多い号で三十余名の出詠者があり、旭川在住者では、磯野照子、中山洋一らの名前を確認できる。

第四巻以降は、札幌アララギ歌会誌のような存在となっていたようである。その後、道内各地のアララギ会員が合流し、一九五六年一月に「北海道アララギ」(北海道アララギ発行)が創刊したことも受け、第五巻第一号(一九五七年一月号)＝通巻四十一号をもって終刊となった。

北海道歌人会編『北海道短歌事典』の「あかだも」の項目には「熱心な会員の一人に堀田(現三浦)綾子もいた」と記されており、以下のように、前半の誌面で、堀田綾子の出詠や他の会員からの評を見ることができるとある。

今回調査できた「あかだも」は、北海道大学附属図書館蔵の一九五五年十一月号～一九五七年一月号(最終号)、北海道立図書館蔵の一九五五年三月号、一九五六年六月～八月号、函館市中央図書館蔵の一九五五年四月号、六月号～八月号のみであり、残念ながら他の号の収蔵は確認されていない。したがって、今後、他の号が発見されればまた新たな未収録歌の発見につながることを思われる。また、「あかだも」と同時期に、「いちじく」(三浦綾子記念文学館所蔵資料)や『道ありき』に登場する「保

(二六)

健同人」での創作発表や投書も看過できない。紙面の都合で今回は割愛するが、作家以前の三浦綾子を理解する資料として今後さらなる調査研究を進める必要がある。

以下、歌番号1～22は便宜上のものである。また、歌番号上の「\*」は、三浦光世との合同歌集『共に歩めば』(聖燈社、一九七三年)に収録されていない、単行本未収録歌十一首である。また、資料として、堀田綾子にかかわる文章は連名のものも含めて引用した。

加えて、発表年はさかのぼるが、「旭川アララギ会報」に掲載され、単行本未収録であった短歌二首も確認できたので、最後に記しておく。これを加えると、本稿における単行本未収録歌は、計十三首となる。

なお、誌面における漢字の旧字体は、ワープロソフトで変換し得るもののみ可能な限り反映させた。

「あかだも」第三卷第三号・通卷第六号（一九五五年三月  
号 二月二〇日発行）

作品集

旭川 堀田綾子

- 1・聖晚餐の絵のかゝりあるかの部屋に育ちて病みて逝きたる君よ
- 2・「笑つていても淋しそうな顔」と云<sup>ママ</sup>わるればそれよりたゞに淋しかりけり
- 3・晝も灯す小暗き部屋に常臥して今日は訳す使徒行伝十二章の幾節
- 4・単語いくつか覚えて疲るゝ午后にして泪ぐみやすくなりしを想ふ
- \*5・誰か居る気配に後を振り向けば壁に大きく写る吾が影
- \*6・松枝<sup>5</sup>さん夫妻の賀状に去年生まれし淳子ちゃんの名を刷りてある

作品合評

・あさまだき尿に立ちし時のまも遠いかづちの音なき光  
虻川秀夫

（堀田綾子）朝明けの侘しいある感じが出てゐると思ひます。調子が良過ぎるのが気になります。特に上句「時のまも」が気になります。芳美<sup>6</sup>調の歌です。

（小国孝徳）如何にもアララギ調だと思はしめられる見事な自然詠である。こゝにいみじくも作者の日常の孤独と寂寥とが滲み出てゐる。或いは作者のさういふ気分がゆくりなく囑目した光景を一首に把握したとも云へやうか。この孤独と寂寥のひそむのを感じ得るか否かに依てこの作品に対する評價は決定するだろう。技巧的にも格調正しく洗練されてゐて云ふべきことはない。強いて云へば、やはり似た様な先例がある様に思はれる点であらうか。

・山際の入り陽鋭く雲を染め光りつゝ玉の如き時雨よ

中山一夫

(小国孝徳) すつきりして而もフレツシユな味がある。

下句はこゝに主眼があり作者の苦心もあると思ふし、誠に上手いが少しく歌壇的に繋がる作風だと云つては云ひ過ぎだらうか。勿論上手くていけないことはないが、少々気分的に流れている感がある。「よ」止めがその感を強めている。「よ」を使へば一般に甘いと云はれるのが常であるが、こゝでもやはりその批難が当るであらう。(堀田綾子) 上句は上手いと思ひます。結句が拙くて歌に気取が出たのではないか。字余りになつても「時雨降る」とでもしてもらつた方がよかつた様に思ふ。一連を通してポーズが目立ちます。地味に歌つてほしい。

7・ 刑務所の鐘が短かく鳴りにけりギプスに吾の目醒め  
けるとき  
堀田綾子

(眞野恵生) 「鳴りにけり」と「目醒めける」の語感が妙に古く、しかも「けり」と「ける」とが重なつて一首を単調にしてしまつた。素材はすぐれている。それをうたはうとした作者の目はもつと鋭いものを持つてゐるはず

ではないか。

(磯野照子) 作者としては何の苦勞もなく、と云つて良い位楽に作り上げた一首だと思ふ。それだけに誰にでも分り好感は持たれると思ふが、平凡に過ぎた感は免れない。素材も私は特にすぐれてゐるとは思はれないが……。「けり」と「ける」については大体前評に同感であるが、私は「ける」を一考したならば「けり」はこのまゝ、でいゝと思ふ。

冬はギプスが冷えます。寒い旭川で堀田さんお風邪に御注意下さい。

「あかだも」第三巻第四号(一九五五年四月号) 三月二〇日発行

作品集<sup>(9)</sup>  
旭川 堀田綾子

8・ マーガレットに覆はれて清かりし御柩と伝へ聞きし  
を夢に見たりき

\* 9・ 「淋しき今は汝に逢ひたし」と亡き君が贈ひし短冊  
を掛けて吾が臥す

\*10・「幽霊になつても来ます」冗談に云ひ給ひしを想ひ  
出づ君亡きあとに

### 雑感

堀田綾子

その一 磯野さんの歌に関して

眞野さんが五号に磯野照子論を書いてゐた。少しく私は異ふ意見を持つてゐるので、それを書いてみたい。

磯野さんの作品は素直だけではなく、確に芯がある。「アララギ以外は読まない」と云つてゐられる事を知り成程、この人の芯はさうした態度にあるのかと合点した。眞野さんは、「常に似通つた雰囲気であり、同じ様な調子の詠嘆である」事を不満とし、「もつとうたはなければならぬ事があるのではないか」と云ひ、類型的マンネリズムに陥り易い事の一つに写生に対する概念が制約してゐるのではないかと、憂ひてゐられる。

然し私は云ひ度い。マンネリズムとは内容の死んだ形のみを残つたものを云ふが、磯野さんの場合マンネリズムとは云へないし、アララギ一本で行かうとする磯野さんの歌に期待出来るのは、これからだと思ふ。アララギ

で云ふ処の「写生」は広く且つ深い。私としては磯野さんのアララギ一本で行く態度にこそ望みをかけ得る。勿論私達は誰しも現在に満足してゐてはいけなしい、磯野さんだつて進歩を希つてゐればこそ私から見ると驚嘆すべき努力を払つてゐるのだと思ふ。

私は此処で緊張の問題を思ひ出した。アララギ一月号で五味保義氏が佐藤信英氏の歌を評して「作者の病床の歌も既に久しいがやはり少しづつ進歩してゐるのではあるまいか、同じ境地をよみつゞけてゐるのに、読者があまり飽きを感じないといふのは、作者の自ら恃んでゐる所である。つまり緊張してゐる事によるのではあるまいか。此五首の材料の如き、沢山に見られる病者の歌のそれと全く異なる所がないのに、句法の末まで気持が透つてゐる所に私はそれを感じてゐる。」と云つたその緊張である。

私は短歌への反省の根本を此の緊張に置き度い。私達が眞の意味でよき生活を為してゐるのであれば、その生活は静かなる緊張に満ちてゐるのであらうから。

文明はその作歌入門に「短歌の如き抒情詩に於て個性

と云ふのは寧ろ作品の一つ一つについて云ふべきであつて、各作品の個性と作者の傾向即ち個性といふものは二段に考ふるべきであると思ふ」と云つてゐるが緊張と作品一つ一つの個性と云ふものは密切なる関係に於て理解されるべきであらう。「一首一首に表現された主観の強さの度合が、個性を形づくる基本でなければならぬ」(文明短歌入門)のであるから生活の緊張を欠き個性を失つた類型的作品が続出する時マンネリズムに陥つたと云ふべきであらうが磯野さんの場合一首一首今の調子で、着実に伸びのびと歌つて行つて欲しい時で、今迄に会得された写生が更に深化されるのを期待されるべき時であると思ふし、今迄の勉強が役立つのはこれからであると思ふ。

前後したが磯野さんは病気をし恋愛をしてから歌が変つた。上手になつた。成長した。これは磯野さん自身の成長であつたのだらう。考へてみてよい問題だと思ふ。磯野さんの現在に不らずしも満足では無いが、その態度に大いなる敬意を表する。

その二 「歌はなければならぬものについて」  
 「もつと歌はなければならぬ事があるのではないか」の眞野さんの言葉は、宮浦さんの短歌有用と同じ意味で云つたのではないにしても私は宮浦さんの言葉を連想した。

この頃かうした言葉はよく聴くが今の世にあつてその様に云ひ度い心持はわかるけれどももつと人間を形成するものの多くある事をゆつくり考へてほしい。

「歌はなければならぬもの」といふより「歌はずにゐられぬもの」即ち各々の持つ短歌のテーマは各個人のものであらう。

花の事はかり歌ふ人恋愛歌ばかり作る人職場の事はかり詠む人それぞれ生命の叫びである限りそれでいいのではないか、否さうあるべきではないか。文学は集団活動ではなく純個人的なものだから。

赤松俊子の原爆の図だけが絵であると云ふ人がゐたらどうだらう？ルノワールの豊かな「裸婦」ゴッホの強烈な「ひまわり」ミケランゼロの「エレミヤ」ムリリヨの「イエス」ローランサンの「少女」等々それら一つ一つに

私達はどんなに眞の生命を見出して或は安らひ或は励まされ高められて来た事か。一生石や花ばかり描く画家に「もつと他に描くべきものがあるのではないか」とは云へない様に思ふ。

短歌も同様であらう。その人はその人なりの生活を詠みつゝ段々深化して行くべく努力すべきであつて、其処には勿論漫然たるものは許されぬ。私達は云はば一つの覚悟態度を明確にして歌を作らなければならない。さうした限りに於て、「歌はなければならぬものは各自の問題としておいていいのではないだらうか。」

### その三 宮浦さんに一言

宮浦さんの「今日有用の短歌」に対する村上さんの駁文はその一部に賛成しがたい処もあるが、ファツシズムの危険を妊んでゐる事を憂ひての指摘は鋭い。非常に重要な問題である事は事実である。

それとは別に宮浦さんの「今日有用の宗教」とも云ふべき「依古地の本質について」に触れてみたい。まるでメチャクチャな混乱ぶりで驚ろいてしまった。

宮浦さん「宗教」と「政治」「経済」「哲学」等々は次元が違ひます。

他の宗教の事は知らぬがキリスト教徒は神本位に生きんとし、普通の人は人間本位に生きんとしてゐる。神本位に生きようとする者に対して人間本位に生きようとする者が、肯定し得ずに「病む事」に対してのみならず依古地になつて行くは当然であつて誠に明白な事柄なのだ。

あれだけの紙数を費す事も無かつたのだ。

何よりも困つたのは物指で重さを測る様な見当違ひを宮浦さんは、やつてしまつたと云ふ事だ。神を求めんとする事と神を己れの欲望に服従せしめんとする事とは火と水以上に正反對の事である事を知つて頂き度い。

言葉は足りぬが、誤謬に気づいて下されば倅ひと思ふ。

（二月九日）

### 作品合評

\*11・永病みに黜ずみし吾が乳暈よ触るればあはれ乳首ちくびの起ち来る  
堀田綾子

(東米吉) 作者のいつも一途な捨身的な詠み振りには敬意を表してゐる。この一首も語句の斡旋など誠に細心であり巧みであり、一読訴える処強烈すぎる程である。作者の面目の躍如としてゐるものでらうが、それ丈にこの題材を取り上げた事に対しては、私は賛同する事をためらう。(余りにあからさま過ぎて)

(加藤美穂) 作者の意図するところは「病者の己が肉体に対する哀感」とは思ふが、私は素材に対して、医学的に「体力消耗と色素の関係」も不明であるし、私自身の肉体についても誠に不注意であつて、参考に資するものを持たない。けれども歌はそのやうな方面から検討すべきでなく、あくまでも、作者の實際経験を尊重して読解すべきものとしても、「あはれ乳首の起ち来る」は、矢張り作者ひとりの感慨で終つてゐるやうに思ふ。結局、私にはこの歌の良否はわからない。

(小国孝徳) 一読して作者の療養状況が偲ばれ、側々と同情を誘はれる一首である。東氏の「あからさま過ぎる」といふ評に私は賛成出来ないが、之は私の職業の故ばかりではない積りである。又加藤さんの「作者ひとりの感

(四二)

慨」といふことも時と場合に依ては乳首の勃起といふことは成熟期にある女性の普遍的生理現象と考へられるので首肯しかねる。表現面では三句の「よ」止めや「あはれ」の感嘆詞の挿入に依て幾分類型的になつてゐるのが惜しまれ、また感情過多の気分がなくもないが、結句で「乳首の」と「の」を入れて軽々しく流れるのを防いだ当りは用意の周到なものがある。

「あかだも」第三卷第六号(一九五五年六月号) 五月二十  
五日発行)

六月集 其一 武藤善友選 旭川 堀田綾子

12・さまざまの苦しみの果てに知りし君その君も僅か五  
年にて逝きぬ

13・唯一人の吾の唇を知りしのみ三十五才にて君は逝き  
たり

14・クリスチヤンの倫理に生きて童貞のまゝに逝きたり  
三十五才なりき

15・かの日共に死にたるつもりにて吾が髪も君の遺髪

箱に納めぬ

\* 16 ・ ラケットを振り上げし腕の逞しく写り居りああ君生  
きて在せし姿いま

\* 17 ・ 君の亡き吾に未来の空想など出来なくなりぬたゞに  
ただに淋し

\* 18 ・ 「早く癒つて結婚をしなさい」と云うこの人も亡き  
君とのわが恋愛を無視してゐる

\* 19 ・ 「伝道に使つて下さい」と死刑囚君らが送りくれき  
切手十枚

20 ・ キリスト村より屈さし卵を一つ一つ掌てに載せてゐき  
ギブスに臥して

\* 21 ・ 先生が拓き給いしキリスト村江別原野を恋ひつつ臥  
しぬ

\* 22 ・ 君の分迄生きむと氣負来し十一ヶ月に吾を支へしは  
聖書一冊

六月集其一選評 武藤善友

堀田さんの作品は非常に達者なよみぶりであり純情一途  
な点は心うたれます。ここより今一步深みのあるもの――

複雑性が出て来ることを希望します。

四月号一人一首評 有賀正男

○マーガレットに覆はれて清かりし御柩と伝へ聞きしを  
夢に見たりき  
堀田綾子

相聞の情淡く表はれていい

「あかだも」第三卷第七号（一九五五年七月号）六月二十  
五日発行）

作品合評

・ 旭ビルデパートの包み紙捨てられありおだしく晴れし  
峡の雪道  
中山洋一⑭

（有賀正男）遠慮なく評すれば、ああそうですか、と言ふ  
所。作者が商人であるらしいから、包み紙に感動がある  
のだから、読者に訴ふる何物も無い。「おだしく」は浅  
学の小生には不可解。此の作者の他の作品についても言  
える事だが、古い言葉をわざわざ使はずに、現在の日常

語をもつて作歌しなければ、古い歌、個性のない歌になる。

(堀田綾子) 人もあまり通らぬ峠の雪道にデパートの包紙を見ての感動を詠つて、静かな峠の感が出てゐて佳。

この場合、「おだしく」はいい言葉を使つてゐる。「おだしき」、「おだしく」は、小国さん、前川さん、古川さんも使つてゐられるが、「穏やか」「落着いてゐる」といふ意。(念の為磯野さんに調べていただいた)。古語必ずしも悪いとは思はない。要は的確な語か、否かであらう。この作者は農業である。前評の如き職業の如何に關はるといふ感動とは違ふ。この感動は私にはよくわかる。

(樋口作太郎) 旭ビルと個<sup>ミヤ</sup>有名詞まで出したのがどうかと思はれます。このままでよく受け入れられます。一連六首の他の作にもそれぞれ情感が出てゐます。然し結局は各人の好みでないでせうか。

(四四)

「あかだも」第三卷第八号(一九五五年八月号) 五月二十  
五日発行) 中山一夫追悼号

※綾子の新作は掲載なし

六月集その一より 有賀正男

・さまざまの苦しみの果てに知りし君その君も僅か五年  
にて逝きぬ 堀田綾子

露出過度的な作品が多い作者には今月の作品は皆淡  
い。しかし是も相聞の情は充分に分るであらふ。

<sup>(15)</sup> アララギ六月号其の三評 有賀正男

・冷淡に交はり乍ら兄弟姉妹と呼ぶなりクリスチャンわ  
れらの世界 堀田綾子

前の歌と極めて対照的な作品である。年代の相違から  
生ずるものであらふか、しかし年代故と、片付けられな  
い硬さが此の作品にある。「世界」「冷淡」とか言ふ用語  
に因するものであらふ。しかし其の硬さが、余り気にな

らないのは作者の力量に依るものもあらふ。余分な事だが。極めてさぐりあふ如く懷疑的に交はりながらお互に「タワリシチ」（同志）と呼びあふ、コミュニニストの世界と相通ずる点があるのは、不<sup>マ</sup>思<sup>マ</sup>だが哲学的な結社と言ふものは、そんなものかも知れない。

「あかだも」第三卷第十号（一九五五年十一月号）十一月一日発行<sup>16</sup>

※綾子の新作は掲載なし

アララギ九月号其二作品評 酒本寿朔

編集者からアララギ其二欄の道内会員のもの六、七首を選出して、批評するやう仰せつかつたので、さてどの歌を採り上げやうと思つたが、今回は私も「あかだも」入会直後で会員の顔ぶれもよく知つてゐないので、はつきり会員と解つた人のものを選んで見た。

（略）○

・五年ぶりに下駄を履きにき土の上にああわたしは立つてゐる<sup>17</sup>

堀田綾子

作者のいつもながらのゆたかな情感あふれた歌である。甘いやうでいて具体化され表現の中に入ると不思議とキザに感じ<sup>マ</sup>のないのが堀田さんの歌である。一、二句など俗であるが三句以下に緊めてゐる。「わたしは立つてゐる」は突放したやう表現は甘さを脱してゐる。美しい抒情も時にはきはどいとところに止まつてゐるといふ危険が感じないでもない。

「あかだも」第三卷第十一号（一九五五年十二月号）十二月一日発行

※綾子の新作は掲載なし

アララギ十一月号掲載作より一首転載。

・胸に載せて食ぶる四年に吾が乳房肉づきてまろくまろくなりたり

堀田綾子

「旭川アララギ会報」第八号（一九五〇年九月十日）

「八月歌会記録（前川宅）」

一九五〇年八月二十日開催

\*・しばらくは涙ぐみつつ居給ひしがさりげなくアカシアの花咲きたると云ふ  
堀田綾子

\*・起床を一時間早くせし日より何かよい事が起る様に想ひつつ六日過しぬ  
堀田綾子

「旭川アララギ会報」第二十号（一九五一年九月十六日）

「プロフィール（二）」

堀田綾子氏<sup>(18)</sup>

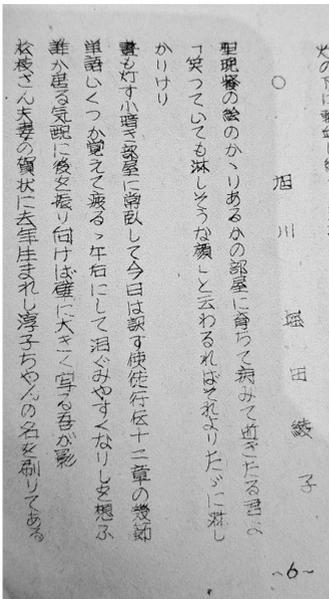
背丈五尺一寸位。ごくスマート型。体重は一桁位かな。いつもオアシを持つてゐないが、貧乏くさくないのも妙。和服、洋服共に二三枚しか持つていないが、エンヂ系の色で統一してゐるので、割にうまく着る。永い間、先生をしてゐるが、つまらない教員タイプなど少しもな

(四六)

い。おかつば髪は、パーマ全盛時代には珍らしい。目玉のデツカイ所は美人の要素を備へてゐる。あの話も、この話も、はなせるひと。吾と思はん者は、氏の目玉をよくみつめてお話し下さい。口以上に物を云ひます。するとあの素晴らしい歌が一層強く上手いと思ふでせう。歌を始めて二年目。

【単行本未収録歌の図版の一部】

- ① 「あかだも」第三巻第三号・通巻第六号（一九五五年三月号 二月二〇日発行）





上綾朗」の項目(三五二頁)より。なお、「あかだも」一九五五年六月号「編集後記」に、「本号より、以前に加藤美穂氏等が出て居られた、「あかだも」の号数も加へて記載することになりました」と、村上綾朗名で記されている。

(3) 一九五五年十一月号「編集所便」で、藤本和子記として、「一年余本誌の編集に御盡力下さった上村みのる・村上綾朗両氏の御労苦に心より感謝致します。本号より私の手許で編集をした」とある。

(4) 北海道新聞社、一九八〇年、一六九、一七〇頁。

(5) 松枝彬。「アララギ」「旭川アララギ」の会員で、居住地は天塩国風連村、のちトマムと記載されていた。中学校の教員で、三浦綾子『白き冬日』(学習研究社、一九八五年)所収の「生徒たちを前に」(初出は「ベルママン」学習研究社、一九八三年三月号)に、松枝の「自主性なき教員の吾も一人にて生徒に平和を説かなくなりつ」が引用されている。前川正の短歌にも、「編輯の相談終へて帰りゆきし松枝君細谷君バーをあらして愉快なりきと便り呉る」「酒呑まねば君らより幾らかは煙たがられ早々として去る細谷君松枝君」(二首とも「旭川アララギ会報」第十五号・一九五一年五月二十日に掲載、『生命に刻まれし愛のかたみ』所収「前川正歌集」未収録作品)と名前を詠まれている。

(6) 歌人の近藤芳美(一九一三〜二〇〇六年)のこと。「アララギ」入会后、戦後に宮柵二らと新歌人集団を結成。一九五一年に「未来」を結成し、岡井隆や河野愛子ら著名歌人の活躍の場となった。『生命に刻まれし愛のかたみ』所収一九五〇年四月八日前川正から堀田綾子宛の書簡でも、「短歌作者ニ二型ガアルヨウデス。(略) 神経型ト、体臭型。(略)「アララギ」デ考エレバ明瞭。前者、近藤芳美、後者、茂吉、文明。前者ハイワユル、インテリ型。」(引用は新潮文庫、一九八〇年、一一三頁より)と、近藤芳美の歌風が分析されていた。

(7) 眞野恵生。会員の一人で、居住地は常呂。次号「あかだも」第三巻第四号掲載の堀田綾子「雑感」中の「眞野さん」も同氏のこと。

(8) 磯野照子。会員の一人で、居住地は旭川。一時期、洞爺の療養所から寄稿していた時期もあった。「旭川アララギ会報」第十九号(一九五一年八月十九日)の「プロフィール」欄には、「今年学芸大卒業。旭川市の北都中学に勤務。純情可憐(?)。眼鏡をかけてゐても、オツカない先生タイプではなく、まだ女学生らしい所抜けず。」と書かれていた(執筆者は個人名記載のない会員であるが、磯野の前に前川正、後ろに安部公房の母である安部よりみのプロフィールが記

載されており、注目される。「あかだも」第三卷第六号（一九五五年六月号）五月二十五日発行）では巻頭に短歌掲載。武藤善友から高く評価されていた。「あかだも」第三卷第四号掲載の堀田綾子「雑感」中の「磯野さん」も同氏のこと。

(9) この欄に、「札幌 日野イト」名で七首掲載がある。日野イトは、三浦綾子の『この土の器をも』（主婦の友社、一九七〇年）十七に登場する「札幌の友人」であり、カトリック教徒で精神科病院の主任保母として勤務していたという。

(10) 五味保義（一九〇一〜一九八二年）。歌人・万葉学者。長野県生まれ。東京高等師範学校入学後、一九二三年に「アララギ」入会。その後、京都帝国大学に入学し、上代文学を学んだ。戦後は、東京都世田谷区奥沢の自宅を「アララギ」発行所とし、運営に尽力した。なお、この五味の文章は「アララギ」一九五五年一月号八七〜八八頁の「昭和二十九年のアララギ（二）」からの引用であるが、用字や句読点等、原文とは十カ所相違がある。

(11) 宮浦信晴。会員の一人。「アララギ」「潮汐」「羊蹄」「原始林」で短歌を発表した。なお、歌誌「潮汐」には三国玲子が参加しており、三国玲子「アララギ選歌欄」に表れたる最

近の恋愛歌」（「潮汐」第八卷第九号・一九五二年十月号、十一〜十二頁）には、次のように堀田綾子の短歌も引用されていた。

結ばれし日はなと今日の君が便り吾の義眼を知り  
居給ふや（二七・一） 中野康子

これは又女性としてはなかなか勇敢な表現である。女らしい見栄やはにかみをかなぐり捨てて、ずばりと自分を投出してゐるところは尊敬に価する。同じやうな傾向をもつ作品に、

五十歳の社長夫人に何時も何時もコーヒーを奢られ  
てゐるあなたは嫌ひ（二七・二） 堀田綾子

何処の者とも判らぬ男に酌をしかせぐ妻かもああ  
治りたい（二七・一） 寺田純治

前者は女性、後者は男性の側から夫々の対応に反撥批判し、或ひは微妙な焦慮、嫉妬めいた心の翳りをえぐり出してゐて興味深い、と言つては作者に失礼に当るであらうか。確かにこの二首はぎりぎりの立場に於て歌はれたものに違ひないのであるから。にも関わらず両者から軽いユーモアをさへ感じるといふのは、この二首が現世相の一断面を期せずして諷刺してゐるからなのであら

う。どちらも口語調で構成されてゐる点もそのやうな効果を手けてゐるやうだ。

(12) 赤松俊子<sup>と</sup>丸木俊<sup>と</sup>(一九一二〜二〇〇〇年)。洋画家。北海道雨竜郡秩父別村生まれ。北海道庁立旭川高等女学校から女子美術専門学校に進んだ。丸木位里との結婚後も一九五六年までは赤松俊子名を使用していた。

(13) キリスト村は、西村食品工業株式会社の創業者である西村久蔵によつて開墾された江別市東野幌の村。泥炭地の開墾に励んだが、一九五三年七月十二日、西村が急死。

(14) 中山洋一が歌作を始めたのは、堀田綾子の勧めがあつたからとのこと。三浦綾子の『丘の上の邂逅』(小学館、二〇一二年)に、「中山洋一さんのこと」が収録されている。それによると、中山洋一は旭川市の啓明国民学校での綾子の教え子中山美恵子の弟であり、のち、鷹栖に移り、道内の日本基督教団の牧師になった。二〇一八年七月三十日、八七歳で逝去。

「あかだも」第四卷第八号(一九五六年八月号 八月一日発行)の、中山洋一による自作自評「私のうた」に、堀田綾子の名前が登場しているので紹介しておきたい(傍線は引用者による)。

自作自評 私のうた 中山洋一

(略)

⑤雨雲が低く南に廻りたりわれも撒粉機の操作を急ぐ

⑥膝に置きしアララギ月報から目を移し大根おろしに醬油を差しぬ

堀田綾子先生のお勧めに依つて、歌を始めたのが昭和二十六年であつたが、その年の旭川アララギ年刊歌集に載せられた内の二首である。

(略)

②手鏡に映しつゝ食事を撰る様も常臥す君が慣れし仕草よ

③父母が和める記憶遂になし吾が幼なかりし札幌でも旭川でも

②は昨年御病気の堀田綾子先生をお訪ねした時の作だが、私は好んでゐる。下句は綺麗事になつたのだらうか。③は良し悪しは兎に角として歌ひたい所であつた。(以下略)

(15) 会員の短歌で、全国誌「アララギ」近号に掲載されたものを選んで評したコーナー。

(16) この号の二三〜二五頁、有賀正男「試歩路を讀みて」に、中城ふみ子の「沈丁花閉じておぼろの春の夜をまた妻として泣く事なけむ」が引用されている。『試歩路』は、年刊療

養歌集編纂委員会編『年刊療養歌集1955年版 試歩路』  
（第二書房、一九五四年）である。帯広出身の夭折の歌人中  
城ふみ子（一九二二～一九五四年）は、綾子と同年生まれ  
であった。

(17) 実際の「アララギ」掲載歌の表記は、「五年ぶりにて下  
駄を履きにき土の上にああ生きてわたしは立つてゐる」で  
あった。

(18) このプロフィールの前半部は、三浦綾子『白き冬日』（学  
習研究社、一九八五年）所収「貧しさの中で」（初出は「ベルマ  
ン」学習研究社、一九八四年十二月号）に収録されている。

なお、調査にあたっては、北海道立図書館北方資料室、北  
海道大学附属図書館、函館市中央図書館、三浦綾子記念文学  
館にお世話になった。あらためて感謝申し上げる。

### 付・「あかだも」掲載の前川正追悼文

前川正研究に資するべく、「あかだも」掲載の前川正追  
悼文をここに記載しておく。執筆者の松枝彬について  
は、先の注（5）に記している。

なお、前川正の短歌引用箇所について、「人文論集」第  
75号および『生命に刻まれし愛のかたみ』遺稿歌との表  
記が異なる点があるが、注は煩雑になるため最小限にと  
どめた。

「あかだも」第三巻第四号（一九五五年四月号）三月二〇  
日発行

### 故前川氏の歌について

松枝 彬

「あかだも」編集者より、「前川正論」を書く様にとの  
依頼を受けたが僕には「論」は出来さうにないので彼の  
初期から死に至る迄の作品より少しく抄出して評になら  
ざる評、又は彼を知らざる人に対しての紹介を兼ねて雑  
文を記さうと思ふ。

彼の作品は僕の考へとしては次の四つに区分されるよ  
うに思ふ。即ち、

一、昭和二十年以前の謂所極く初心時代。（彼の遺稿  
に依れば昭和十六年の作が最も古い。）

二、昭和二十一年以降「羊蹄」発刊時代。既にアララ

ギに入会し、歌といふものに対してはつきりとした意識を以て作歌した時代。

三、「旭川アララギ月報」<sup>マ</sup> 発刊時代。この時期は月報の責任者として最も活動した時である。

四、昭和二十八年以降死に至る迄の沈潜した時代。

大別して右の様になるかと思ふので以下各時代別に雑記しやう。

冷たしとかねて聞けどもその皮膚に初めて触れしこの触感は(屍体解剖)

天に向け歓声あぐる葉の力結球白菜は逞しく伸ぶ

消毒の沃丁綿<sup>①</sup>の冷たさに息の根止めてメスを待ちた

り  
齋庭<sup>②</sup>への榆の老樹の秀つ枝なる寄生木<sup>ヤドリギ</sup>の上に雪積み  
にけり

白壁の天守閣なす記念館の大扉は閉ぢて細道一つ

「一、」の時代は昭和十六年より二十年迄である。この間の彼は、十六年北大医学部入学、十七年肋膜炎にかかり休学、十九年三月旭川日赤病院にて痔の手術を行つてゐる。初期の歌故稚拙さは当然であるが、いづれも素直で

あり、一つ一つをこつこつと作る態度が出てゐやう。

煤煙に黒ずむ春の雪の上投げ捨てられし蟹の甲赤し  
講義室の窓明け放たれて若葉風すがしき中にノート  
す吾は

局所をば放射状に取巻いて止血鉗子の色の冷たし  
意識的に一線を引きて処女に対するも永病む吾の小

さき倫理

さざめきて来る処女の一団こゝにもまた乱れ来し日  
本の語法

つづまりは主体性といふ語に逃避する君も僕も雑誌  
よりの知識にて

踏みゆけば靴に抵抗感が柔かしくローバーに霜結ぶ  
凍土の道

二十一年——二十三年の歌である。二十一年全快し復  
学、同年「羊蹄」発刊さる。同年十二月再発、以後一進

一退のまゝ、自宅にて療養生活。これがこの間の彼の生活  
であつた。一首目の歌はアララギに始めて入選した作で  
あり、二首目の歌は羊蹄創刊号に出た作である。この時  
期に於ける彼は、復学、休学、再度の療養、等あわたゞ

しい三年であつた。

樋口賢治先生による「羊蹄」発刊は彼をして一層歌に  
精進せしめることになつた。

この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音  
をたてつつ

葡萄酒を一口飲んでまたいぬる午後の静臥は脚ちぢ  
めつ、

平和をば唯祈るより術なきか組織なく気力なきクリ  
スチャン我等

暴力を否定する我等クリスチャン労組で常に反動と  
呼ばれて

共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところ  
に終る

ネクタイを結び直してくる、時近々と二重瞼が匂ふ  
が如し

笛の如く鳴りゐる胸に汝を抱けば吾が淋しさの極ま  
りにけり

沃丁のしみたる爪も目に立ちて微熱ある汝は睡り居  
りたり

乳鉢に葉磨りゐる澄める音静臥のまゝに聴きて居り  
たり

跪く頭上近々と響く声あゝ今西村先生が祈つて下さ  
る

二十四年旭川アラギ月報<sup>マツ</sup>が発刊された。これは旭川  
地方に在住する会員の有志が発起人とはなつてゐるが最  
初の数字を除き三十五号迄は彼一人の努力によつてなさ  
れた。後年遂に死に至つたのは或ひはこの過労も一因で  
はなかつたかと思はれ、会員の一人として自責の念に堪  
へないものがある。

この時代の彼は病状一進一退とは言へ概して元氣であ  
り二十七年には体重十七貫に及んでゐた。又歌の方も最  
も作多く充実してゐる。療養中のこと故それらに關した  
作が多いのは当然だが、この時代で目につくのは右以外  
に、1、戦争反対、平和への希望の歌。これは朝鮮動乱  
と例の予備隊が出来、次第に重苦しい空気が満ち初めた  
頃であるからと思ふ。2、は「汝」といふ語で表はされ  
てゐる一女性への愛情を寄せたと思はれる作にすぐれた  
ものがある。

コルペン  
広底瓶に酸素気泡の清き音麻酔の醒めし耳に聞こゆる

手術二日目酸素に唸<sup>あざと</sup>ふ吾を見て牧師さん静かに祈り去る

日本猿も結核になれば人の如く軽くしはぶくとぞ聞けばあはれぞ

咳<sup>⑥</sup>のしかた様々に変へ脂汗二時間かかり痰一つ出す

常臥の吾が居ては結婚も出来ぬ弟の優しくして今日も菓子を買ひ来ぬ

自ら体力の消耗を感じずれど看護の母には告げずおくべし

体力の消耗を秘かに待ちて安らかな死を願ひ臥す吾ぞ

足の先しびれ冷たくなりて来つ死ぬ時もかゝる様を繰返すらむ

この期間は二十七年暮と二十八年一月札幌大にて成形手術を受け死に至る迄の作である。大手術、安静といふ条件のために作は少いが無造作と思はれる作も一首一首に彼の全力が傾けられて居り深く心を打つものがある。

昭和二十九年五月二日午前一時家族は勿論のこと旭川アラギ会、道内アラギ会員としても未だく生きてゐて活躍して貰ひたかつた彼も天命如何ともする能はず生への祈願も空しく遂に不帰の客となつたのである。

享年三十三歳であつた。

以上拙文であるが彼の作について簡単に述べ擱筆する。

彼の冥福を祈りつつ。

二月七日

※同号「あとがき」に、「アララギ本紙<sup>マ</sup>、旭川アララギで活躍され、こゝしばらく作歌を休まれてゐた松枝彬氏が、ふたたび活動して下さることになりました。氏は目下故前川正氏の歌集を出す仕事をして居られます。今後の活躍を期待すると共に、歌集完成の日を待ちたいと思ひます。」の記載あり。執筆者は村上綾朗。

また、「あかだも」第三巻第六号（一九五五年六月号五月二十五日発行）の「編集後記」に、「五月初旬前川正の歌集が発行される。歌二六七首一四〇頁年譜写真収録して予価一五〇円旭川春光町一区番外地細谷弘治か落合

局区内トママ松枝彬宛に申込まれ度い。発行所でも取りつぎます。（上村）の記載あり。執筆者は上村みゆる。

続く「あかだも」第三巻第七号（一九五五年七月号六月二十五日発行）の「編集後記」にも、「前川正歌集が出版された。頒価一五〇円送料一六円。一読をおす、めする。（上村）の記載あり。

注（付・「あかだも」掲載の前川正追悼文について）

（1）三浦（堀田）綾子との往復書簡を中心とした『生命に刻まれし愛のかたみ』（講談社、一九七三年）所収の「前川正歌集」では、「沃チン綿」の表記。ルビは新潮文庫版（一九八〇年）に基づく。

（2）「斎庭べの〜」と「白壁の〜」の二首は、前出「前川正歌集」では一九四六（昭和二十一年）年作となっている。

（3）「旭川アララギ会報」第十四号（一九五一年三月十一日）では、「なほして」の表記。

（4）「アララギ」一九五一年十二月号では「まま」の表記。

（5）「旭川アララギ月報」第三二号（一九五二年九月二二日）および前出「前川正歌集」では「ああ」の表記。

（6）初出不明。単行本未収録歌であり、本稿における新資料と思われる。

【訂正】前号（「人文論集」75号）収録の「資料紹介 前川正の短歌——『生命に刻まれし愛のかたみ』未収録歌を中心に」に、追加すべき短歌があり、誤りもあつたため、ここに訂正させていただきます。

① 三頁（一一二頁） 次の六首を追加（最後の「満員の〜」が単行本未収録）。

「羊蹄」二卷二号（一九四七年二月）短歌作品 其一

・眞向ふ手術室の排氣管ゆたけく蒸氣噴き出でて夕暮れむとす

・スエーターの女動かぬバルコニー片照る日光淡々しきも

・色づきし楓の杜を遠く見て空氣の透明度を吾が言ひ出でつ

・しづかに牧師の祈禱はひびき窓下を馬のひづめ過ぎ行く

・水霜の融けし衢に漂へるアセチレン瓦斯の臭ひかなしも

\*・満員のバスのゆらぎによろめけば少女のかばふ菊が薫り來

② 一二頁(一〇四頁)

\*136・キリストに君を連れむと伴へば既に噂姦ましきクリスチヤンの世界ぞ  
↓「\*」をトル。

③ 一四頁(二〇二頁)

「旭川アララギ会報」第八号(一九五〇年九月十日)「八月歌会記録(前川宅)」を追加。

\*夜の河に星の映るを云ひし時夜汽車が近く音たててゆく  
\*彼の国の内戦の様を遙かにしおそれてあはれ無力なる吾

④ 一六頁(九九頁)

「旭川アララギ会報」第十五号(一九五一年五月二十日)

\*207・編輯の相談終へて帰りゆきし松枝君細谷君バーをあらいて愉快なりきと便り呉る

↓「あらいて」を「あらして」に訂正。

⑤ ①④により、二頁(一一三頁)「歌番号の上の「\*」は、

『生命に刻まれし愛のかたみ』に収録されていない、単行本未収録歌百六首である」↓「百八首」に訂正。

⑥ 一八頁(九七頁)

「旭川アララギ月報」第十九号↓「旭川アララギ会報」第十号に訂正

⑦ 二八〜二九頁(八七〜八六頁)注(6)に下記を追加。

「旭川アララギ月報」第三十二号(一九五二年九月二十一日)

\*296・跪く頭上に響く祈りああ西村先生が祈つて下さる

「アララギ」一九五二年十二月号 其二 土屋文明選

309・跪く頭上近々と響く聲ああ今西村先生が祈つて下さる